

政治×RPG

旅に出た情報屋 フェアの物語



ガチャ。

心地良い朝日に目を細めながら、少年はポストを開けた。
いつも特に何かが入っているわけではないが、必ず中を確認する。
これは毎朝の日課だ。

しかし今日は違った。

オフホワイトのシンプルなポストの中には、濃紺の封筒が入っている。
取り出して裏を見てみると、封筒は赤色の蠟で閉じられていた。

そこに押された紋章を見た少年は、思わず えっ、と声を上げる。
それは、王宮を表す紋章だったのだ_____



プロローグ ～イズミ王国～



イズミ王国。ここは、海に囲まれた島国で、美しい街並みと自然が広がっている。
それほど広くもないし、「都会」というイメージを持たれることはあまりない。

しかし、この国の民たちの間には笑顔が絶えず、街も賑やかだった。

長年、「平和の象徴のような国」と語られてきたこの国。

だが今、国には混乱が広がっていた。

十日ほど前。この国の王が突如亡くなった。

すぐにでも新国王を選挙で決めたいのだが、国王は政策の具体的な内容を
国民には伝えなかったうえ、政策についてまとめたプリントも紛失。

国王候補たちは、どんな政治をすればいいのかわからなくなった。



そんなことが起こっているとは知らない国民は、
「前王の残した資料があるはずなので、国王が変わっても前と同じ政治が行われる」
と思いこみ、選挙することを放棄した。

しかし、実際は資料などない。
意見を集め、政治を進める人がいないため、国民たちの生活は停滞。

混乱が広がってしまったのだ。



フェア＝エマソンは、この国で情報屋を営む少年である。
今、朝食を食べながら手紙とにらめっこしているのが彼だ。



「王宮から直接、僕宛に…なんでだろう？仕事の依頼、
にしては内容がシンプルすぎるよな…」

封筒から出てきた二つ折りの真っ白な紙。
そこに書かれていたのは、『今日の昼、王宮に来てほしい』
という一文だった。

「僕…何かしでかしたか？」



今は王がまだいないとはいえ、何か悪いことをしたからという理由で呼び出されて、牢獄に入れられる、なんてことに…



まあ…そんなことをした覚えはないけど。

仕事の依頼だとすると、わざわざ会って伝えたい内容だということになる。
どちらにしても、王宮に向かったほうがよさそうだ。

朝食を食べ終えたフェアは、雑務を終わらせ、身支度をして家一家であり事務所—を出た。



王宮は国の北側に、『情報屋』は西側にあるので、歩くと一時間ほどかかる。
でもフェアは街を歩くのが好きだ。馬車などは使わず、徒歩で王宮へ向かったのだが…

「……」

こんなに静かな街だったのだろうか。ここには、いつものような賑わいはない。

フェアは、誰かの笑顔も大好きだ。見ていると自分まで幸せになってしまう、その笑顔が。

ほんの数日前までは、たくさんの人々が笑いあっていたのに…。

王宮への道が、なんだか長く感じた。

俯きがちに歩き、ちょうど太陽が高く昇ったころ、王宮に到着した。

大きな門の前に立っていた門主に名乗ると案内役の男性が現れて、ご案内します、と門の中に通される。

壁や床、家具など、一面に散りばめられた細やかな装飾に目を奪われつつ、案内人についていく。

通された広間にはいくつかテーブルがあって、そのうちの一つに男性と女性が座っていた。





「フェア＝エマソン様をお連れしました。」

と案内人が言うと、二人は

「やあ、来てくれてありがとう。」

「あんな手紙でよく来てくれたな…」

と言いながらこちらに歩み寄ってきた。

「えっと…はじめまして、僕はフェア＝エマソンと
います。情報屋を営んでいます。」

「私たちは二人とも、この国の国王候補なんだよ。わたしの名前はイムレ。
よろしく頼む。」

「私はエメル。フェア君、よろしく。」

「僕に何か御用でしょうか?仕事のご依頼、ですか。」

「ああ、まあそんなところだね。

…早速本題に入るが、君はこの国の現状を
知っているかな？」

イムレに尋ねられたフェアは、ええ、と答える。

「ええ、ある程度は。

選挙ができず国民の間に混乱が広がっています。

僕自身も実感していますよ。

…対策が遅れているのは、国王候補のお二人の仲が悪いせいだ、なんて噂も…あっ…」





「あはは、さすがは敏腕情報屋だ。」

「すみません…」

「いや、いいんだよ。実際、はじめは私たちも対立していたんだけどね、こんなに国が崩壊しかかっているのだ、二人協力しないって意見が合致して、今ではこの通り、親密な仲だからね。」

「そうですか…」

今度はエメルが、ここ最近、と話を引き継ぐ。

「二人でいろいろ話し合ってはいるんだけど、あいにく二人とも国民と同じように混乱していて一向に話が進まないんだよ。」



息を一つついてから、エメルは言った。

「…フェア君は、国の中でも一、二を争うほどの実力を持つ情報屋だと聞いた。
他国を旅して、政治や選挙についての情報をこの国に伝えてはくれないかな。
そして、『誰に任せても同じ』だと考え投票してくれない国民の意識を変えてほしい…！」

二人は横に並んで、フェアの顔を正面から見つめた後、同時に頭を下げた。

「頼む！！」



自分より年上の人に頭を下げられたフェアは、戸惑いながら答えた。
「え…あの、頭、上げてください。えと…僕でよければぜひ、やらせて下さい。」

その言葉を聞いたイムレは、ぱっと目を輝かせた。
「いいのか！？ありがとう！」

エメルも、微笑みながらありがとう、と礼を告げる。
「私たちはフェア君が返ってくるまで、この国の混乱が
これ以上大きくならないように努めるよ。」

「はい！必ず、いろんな情報を届けてみせます！」
フェアは元気にそう口にした。

門まで、二人が送ってくれた。

「明日、港に船をつけておくから、それで出発するといい。」

「ありがとうございます」

「…寂しくないように、君の相棒も仕込んでおいたからね！」

「…えっ？」

何のことですか、と聞こうとしたがその前に案内人が現れて、
結局そのまま二人に手を振った。





翌日。荷造りや部屋の片づけは昨夜のうちに済ませておいたから、あとは国を出るだけだ。

フェアは朝日に照らされた大好きな街を、港に向かって歩いていた。すると、「ふわああっ…、おい…もう少しゆっくり歩けよ、揺れるだろ！！」

どこからか声が聞こえ、足を止めて辺りを見回す。

「だ…誰だ…！？」

「ここだよ、カバンの中！！」

そう言われて、フェアは自分が左手に持っているカバンをゆっくりと開けた。

ふさふさしたしっぽと共に、カバンからひょこっ、と顔を出した声の主は_____

「え……サル？」

「ショウガラゴ！！名前はレニーだ。」

突然現れた人間の言葉を話すショウガラゴを見て、フェアはふと、
昨日のイムレに言われたことを思い出した。

『君の相棒は仕込んでおいたからね！』





「ああ…ってことは、君は僕のあいぼ…って、おい…！」

相棒レニーは、ちょこまかとフェアの腕を駆け登り、そのまま肩にどっかりと腰を下ろした。

「あ…もしかして、ずっと肩の上なの…？」

「？悪いか？」

「いや…まあ…よろしくね。」

「ああ。」

…そんなわけで情報屋のフェアは、この小さな相棒レニーと共に、船に乗り込んだ。

——旅のはじまりだ——

Are you ready?



Yes

No

Attention 一旅に出る前に

この「政治×RPG」は、普通の物語とは少し違います。

これから始まる物語では、ところどころに分岐点があります。
選んだ分岐先のページ番号（リンク先）をクリックで移動して、物語の続きを読んでください。

移動する行先がいくつかある場合は、その中からひとつ、どの方向に移動するか選んでください。
つまり、あなたの選択によって、物語は変化していくのです。
あなたは、本の中を行ったり来たりしながら、物語を進めることになるでしょう。

それから、物語に欠かせないのが、このお話とともにお渡しする「旅の記録」です。
物語の途中、『フェアは、旅の記録に～と書き込んだ』という箇所は要チェック。
忘れないように「旅の記録」に書き込んで、イズミ王国に報告できるよう活用しましょう！

そうして、旅を終えたとき、あなたはきっと大切なことを学んでいることでしょう…



「最初はどちらの国に行きますか？」
地図を片手に船頭さんに聞かれて、フェアは…

- ▶ 「近いほうの、『ウヨキカン』に行きます！」 →21へ
- ▶ 「じゃあ、『ジョダンベッサ』に行こうかな！」 →47へ



政治×RPG ウヨキカン王国



ウヨキカン王国に訪れた。

この国の面積はイズミ王国よりも少し大きく、人口も約3倍の国だ。

「なあ、レニー…」

「なに？」

「僕の目、おかしくなったみたいなんだけど。」

「…同感。というか、俺たちがおかしいわけじゃなくて、ここがおかしいんじゃないか？」

「んー…。ここってどこ？」

「ウヨキカン王国だろ」

レニーは不愛想に答えた。

「いや、そうなんだけどさ、状況を理解してる？」

「もちろん。…道に迷ってるんだろ？」

そう。僕たちは道に迷っている。この国に足を踏み入れて数分で気づいた。

だんだん前が見えなくなっている、ということに。

「これじゃどうしようも…」

「おい、あそこに誰かいるぞ」

僕の声を遮って、レニーは突然声をあげた。

二十代後半の、頭になにかをかぶった男性が向こうからやってくる。

「おい、お前ら。どうしたんだ？」

男性は頭に響く声で話しかけてきた。

「ひっ…。こ、この国のことについて知りたくて…道に迷ってるんです…」

鳥のくちばしのようなマスクをかぶった男性。なんだか怖い…。

上ずった声で発したフェアの言葉に、男性は答える。

「おれが案内してやるよ」

「ありがとうございます…。僕の名前はフェア。」

「おれはイヒイト。よろしく。」

…ちゃんと自己紹介もしてくれた。僕たちのことも助けてくれたし、悪い人ではなさそうだ。

「ところで、どうしてこんなに空気が汚れているんだ？」

突然会話に入ってきたレニー。

はあ…もう少し言葉を選べよ…。





男性は全く気にせず話した。

「そうか？これぐらいが普通じゃないか？ってかお前話せるのか、おもしれえな。」

飲み込み早すぎないか？

「…ああ、お前ら早くマスクやらゴーグルやらつけないと病気になっちゃうぞ？」

それを聞き僕たちは慌ててマスクをした。

「僕の国の様子を見せてあげますよ」

僕は持っていたフィルムを取り出して、映写機のあるところへ行き映像を見せた。

すべての映像が終わった後イヒイトは勢いよくこちらを見る。

「空気はもっときれいにできるということか！？」

その様子を見て、レニーが僕の耳元で言う。

「こいつ、急に目が輝いたな…」

「俺は、今の政治に疑問を持ってるんだよ。

一人の王が何もかも決めている政治なんてほんとに正しいのか？

それに、あんたらの話を聞く限りもっと空気はきれいにできるのに何でやらないんだ？」

イヒイトは問い詰めるように話した。



「なるほど、独裁政治か。」
レニーはそうつぶやいて頷く。

「イヒイト、この国の王は独裁政治って言って、
一人の代表者が民衆の意見は聞かずに自分で決めて進めていくやりかたをしてるんだ。
べつにそれ自体は悪くない。メリットだってある。一人だから、何か決めるのに
時間がかからないんだよ。
でも自分に都合のいいことばかりだと、それは国のみんなの為にはならないよな？
政治が暴走する可能性があるんだ。
この国の空気も、工場からのをちゃんと処理したりしてないから汚れているんだ」

「そうか、だったらちゃんとした人に王になってもらわないと・・・」



僕たちはイヒイトに話を聞きながらこの国を案内してもらっていた。

「ここのパン屋は町一番なんだ」「いい感じの店じゃないか」

わいわいと話しながら歩いていると…

ドンっ、ガシャンッ！

「なんだ！？」

突然大きな音が鳴り響く。僕たちはびっくりして音のしたほうを向いた。

「国王…！？」

なんとそこでは国王が倒れていたのだった。

近くにいた人に事情を聴くと、ついさっきこの場所で交通事故が起こったそうだ。

原因はこの真っ白な空気。前が見えないせいで馬車同士が正面衝突してしまったらしい。

で、その馬車の片方に国王が乗っていたのだ。

「これ…もう国王の仕事できないんじゃないか？」

僕はイヒイトさんと顔を見合わせた。



それから1週間が経った。

「おーいお前らぁ」

「フェア、イヒイトがきたぞ」

レニーの声を聴いて僕は視線を上げた。小走りでこちらにやってきたイヒイトと、軽くあいさつを交わす。

「ああ、イヒイトさん！ どうも。」

「一週間ぶりだなあ」

彼は前より明るい声でそう言った。

「活動のほう、うまくいってます？」

「ああ。おかげさまでこちら辺ほとんどの人が賛同してくれたよ」

そう。あの日以降イヒイトは国の環境と今の政治体制を変えるため、呼びかけを行っている。

「そういえば政治の体制はどうするって呼びかけてるんですか？」



「それがなあ。俺もいろいろ政治について調べたんだが、これから代表候補を集めて誰が王にふさわしいか選挙をしようと思っただけでな。俺も参加することになった。」

「え…えええっ！」

イヒイトさんによると…

選挙に立候補したのはヒルワイト、ラキレンメ、イヒイトの三人で、まず三人に、王になった時の、それぞれの政治方針を演説してもらう。

そして、中間選挙を行い、その結果をもとに三人が選挙活動をする、という形式のようだ。

王は中間選挙の一週間後に決められる。また、投票形式は国民が会場に赴き、紙に3人の中から1人の名前を書き投票箱に投票するというシステムらしい。

それぞれの選挙活動を見てみよう
誰から見てみようかな？

▶ [ヒルワ仆を見る→38へ](#)

▶ [イヒ仆を見る→41へ](#)

▶ [ラキレンメを見る→46へ](#)

▶ [もう3人とも見た→32へ](#)



独裁主義

「では、わたしたちが専門家と話し合った意見のなかから、この活動をしようと思います」

イヒトは代表者たちと専門家の出した案の中から一世帯一個の木を植えることを国民に伝え、工場の強制閉鎖も行った。そのせいで失業者が増加し、GDP(国民1人当たりの収入)も減少してしまった。

が…少し経つと、ウヨキカンの空気は見違えるようにきれいになった。

「レニー、空が青いよ…！」

「ああ、この国もきっと明るい国になるだろうな。」





▶ 43~



三人とも見終わった後



「では、中間投票の結果が出ましたので発表します」

「いよいよだな。」

「うん。」

いま、3人が行った一日国王の様子を見た国民が、誰に王になってほしいか投票した中間結果が出るところだ。僕たちは固唾をのんで見守っている。

「4995票のうちイヒイトさん31.52%、ラキレンメさん14.56%、そしてヒルワイトさん53.92%！ よってヒルワイトさんの勝利！！！！！！」

「嘘だ…」

どうということか理解できず呆然とする。

「現在はこのような結果ですが次の最終投票で王は決まります。引き続き頑張ってください」

役員の説明が終わると、ヒルワイトのもとに大勢の記者が集まってきて、次々と質問を浴びせた。

「ヒルワイトさん、中間投票がこのような結果になりましたがどうお思いですか？」

僕たちの近くでインタビューが始まる。

「はい。中間投票では私が2691票でしたがまだまだ気を引き締めていこうと思います。」
ヒルワイトはきりりとした顔で、インタビュアーにそう話している。

「また、2691票のうち約1500票は貴族などの方々でしたが…」

…ん？

今の記者の発言…なんだか引っかかる。

そっとレニーのほうを向くと、レニーも僕と同じことを考えているようだった。



～その日の夜～

「ありがとうございました。おかげで中間投票に勝利できました。こちらが報酬の50万円です。」

「ああ、どうも。…ヒルワイトさん、王になったら我々のための政治をしてくれるよう、頼むよ～」

「ええ、もちろんですとも。ではこれで失礼します…」

とあるお店の中。昼間の違和感を信じて着いてきてみたら。

まさかこんな会話が…。

ヒルワイトが去ると僕たちはさっきまで彼と話していた貴族に駆け寄る。

「今の、どういうことですか？」

「な、なんだね君たちは。もう遅いんだから…」

「ごまかさないでください。今受け取ったのは何ですか」

「……お金だよ。私のような貴族1500人に『このお金を渡すから中間投票で私に投票してくれ』って」

「つまり・・・賄賂、ですね」

「…そうだ。」

「…は一…わかりました。」

そう言って僕たちはその場を後にした。





～翌日、新聞社にて～

「何？ヒルワイトが贈賄？」

新聞社の社員が大きな声で聴き返す。それに応じて近くの人たちもなんだなんだとこちらに注目し始めた。

「はい。きのうヒルワイトが貴族に贈賄する場面を見ました。貴族も収賄を認めていて、その人含めて約1500人に贈賄したとも言っていました」

それを聞いた社員たちは

「おい！！号外出すぞ！」

と、慌ただしく動き始めた。

～その日の午後～

「号外、号外！ヒルワイトが贈賄！貴族も収賄を認めているよお！」

それを聞き近くの人たちは一気に号外を奪い合い始める。

「最終投票はどうなるかな。」

「わかってるくせに」

尋ねた僕に、レニーは苦笑しながら呟いた。

～ 1 週間後～

「さあ、最終投票の結果を発表します。票の合計は9 5 3 4 票でした。

ではまず…ラキレンメ9.46%！次にヒルワイト6.26%！

そして、イヒイト84.28%！最終投票はイヒイトさんの勝利！！！！！！！！！！」

国民たちからは様々な声が聞こえる。イヒイトの勝利に歓喜の声を上げたり、本当にこの国はよくなっていくのか、という疑問の声も聞こえてくる。

「やったあ！！！」

「みなさん、ありがとうございます！」

僕はガッツポーズを作って喜んだ。

この後イヒイトはこの国課題について語り出す。

「この前見せたようにこの国の空気は汚れています。この原因は何百年も続いた悪い独裁政治のせいなのです。おれは、いままでの悪い独裁政治をやめることで、誰もが満足できる国を目指そうと思います。」



～ 2 日後～

「コンコン」

ドアをノックする音が聞こえて、ドアを開ける。

「は～い、あ、イヒイト王じゃないですか」

「王なんてやめてくれ。フェアたちのおかげで勝てたんだから」

「まあ、やるじゃん」

頬を赤らめるイヒイトと、上から目線のレニー。

「おれはこのあと、この国の環境問題を解決しようと思ってるんだ。」

イヒイトは自分が行う政治を…

▶ 「独裁主義で進めようと思う」 →30へ

▶ 「民主主義で進めようと思う」 →39へ



ヒルワイトの場合

「では、私の政治の方針を説明しよう。私はこの国の問題を知っている。
一刻も早くこの問題を解決するために私だけで判断し、速やかに行動に移る。
それこそがこの国をよりよくする唯一の方法だ。早速、この国中の工場にこう説明しろ。
『今すぐ工場を止めろ』とな」

「ヒルワイトさんの政治は前の独裁政治みたいだね。
それに結構極端だし…環境は良くなるかもだけど、
国民からは不満が多そうだ。」
「ああ。」

ほかの人の様子も見よう！

▶ [29に戻る](#)



民主主義

「ではみなさんの出してくれた案の中から多数決で決まったこの活動をしようと思います」
イヒイトは国民が多数決で決めた、「一世帯一個の木を植える」活動を実践していくことを国民に伝えた。

そして、工場の排気量軽減のために各地の工場とも何度も話し合い、
一時的に工場を閉鎖する活動も行った。
しかし決定に時間を要し、空気がきれいになるまでに時間がかかった。

健康被害が大きくなり、補償問題も長引いてしまったが、
民主主義としての制度は確立し、
「王がかわっても機能する仕組み」を成り立たせることができた。

「レニー、空が青いよ…！」
「ああ、この国もきっと明るい国になるだろうな。」





▶ 45〜



イヒトの場合



「今日は皆さんにご覧になってほしいものを持ってきました。」

そう言ってイヒトさんは映写機のスイッチを入れる。
すると壁に僕たちの国の景色が映った。

「皆さん、この映像はとある旅人の故郷の様子です。この国では環境問題への対策をしていて
空気がとてもきれいです。私が王になったら、こんな景色が広がる国を、
皆さんと一緒に作っていきたいと思います。つきましては、」

ここで一瞬だけ間を取ってから、イヒトは見ていたみんなと目を合わせる。



「私が国王となったら、皆さんと話し合い、工場を有害物質を出さないように稼働できるようになるまでの間止める、といったことを行っていきたいです」
そう言ってイヒイトは演説を終えた。

「いいね。興味がそそらせる演説だし」

「同感だ。結果が待ち遠しいぜ」

ほかの人の様子も見てみよう！

▶ [29に戻る](#)



フェアは、この国でのことを「旅の記録」に書きとめた。[独裁主義]

- ・ウヨキカン国に訪れたが空気が汚れていたこと
- ・迷っているとイヒイトに出会ったこと
- ・彼からこの国の現状について教えてもらったこと
- ・「独裁政治」の特徴について、レニーが言っていたこと
- ・王が事故をおこしたので、3人の中からイヒイトが王になったこと
- ・イヒイトが「良い独裁」を行おうとしていたこと
- ・独裁の良い所は「すぐに決められる」こと
- ・やはり自分たちの国では、自分勝手な独裁ではなく、
みんなの案を採用する独裁を勧めたいなとおもったこと

____こうして、ウヨキカンでの旅は終わった____

君は…

- ▶ まだ一つしか国を訪れていないので、今度は「ジョダンベッサ」に行こう。→47へ
- ▶ もう二つの国を訪問した！よし…イズミ王国に帰ろう。→108へ





フェアは、この国でのことを「旅の記録」に書きとめた。[民主主義]

- ・ウヨキカン国に訪れたが空気が汚れていたこと
- ・迷っているとイヒイトに出会ったこと
- ・彼にこの国の現状について教えてもらったこと
- ・王が事故をおこしたので、3人の中からイヒイトが王になったこと
- ・イヒイトが「民主主義」を行おうとしていたこと
- ・民主主義の良い所は「みんなの意見が反映される」こと
- ・やはり自分たちの国では、みんなの意見で国を作りたいから、民主主義を勧めたいとおもっていること

ラキレンメの場合

「私は…えーと、とにかく皆さんの意見をもとに政治を行っていきたいと思うので…
…皆さんどうということをしてほしいといったことをお知らせしてくださればと…政策は…
皆さんの意見をもとに決めようと思ってます」

「こいつは…中身は悪くないんだけど押しが弱いし、言い方を変えれば全部国民だよりなんだよな。
これじゃあ政策どころか方針すら決まらない。」

「ほんと。けど最後までわからないよ」

ほかの人の様子も見てみよう

▶ [29に戻る](#)





政治×RPG

ジョダンベッサ王国



フェアとレニーは、船に揺られて移動し
ジョダンベッサ王国に足を踏み入れた。

「ここが、ジョダンベッサ王国かあ」

「…」

レニーが珍しく黙り込む。

ここに来る船の中であんなに（今後の人生で使えるのかわからないような）雑学を披露していたレニーが、だ。

「レニー？ どうした？ さっきまであんなに話していたじゃないか。」

「なあ…妙じゃないか？」

「何が？」

どうということかわからず思わず聞き返す。

「考えてみろよ。真っ昼間だってのに会話とか街の賑わいがないじゃないか。」
周りを見渡して、レニーの言うことに納得する。

人があまりいないし、街も静かだ。
「確かにあ、あそこに二人、誰かがいるよ。」

「よし。」
するとレニーが僕から飛び降りる。
「おい。ちょっといいかー？」

おいおい…
内心ひやひやしつつ僕は女性のもとに駆け寄る。





「なんでこの町はここまで静かなんですか？」

女性は人間の言葉を話すレニーに、一瞬目を丸くしたが、すぐに少しうつむいて答えた。

「この国では自由に意見を述べる事ができないんです。」

「それは女性だけか？」

「はい。…他にも…私たちは選挙に参加できる権利が与えられていなかったり…

国を出入りしてはいけなかったり。実は私も、夫に暴力を振るわれて子供と一緒に逃げてきたんです。」

「それは…ひどいな…」

僕は頭を殴られたような衝撃を感じた

「けどなあ、俺たちの国だって2～30年前までは女性に選挙権がなかったり

偏見が激しかったりしたんだぞ？女性や子供への差別なんて当たり前だったんだ。」

「嘘だろ…」



「偏見のない世の中を！」

3人で話しているところに、少し離れたところから声が聞こえた。

「！？」

「男女差別のない、公平な世の中を！」

声のするほうへ目を向けると女性が「男性と女性は平等であるべきだ！」という看板をもって、通りがかる人々に叫んでいた。そしてその女性の足元にはお金が少し入った箱が置いてあった。

「あれは？」

「多分…出稼ぎに似たようなことをしているのでしょう」

レニーが聞くと、女性はそう答えた。

「どういうこと？」

「男女差別によって男性との生活に耐えられなくなった人は道端で出稼ぎなどで生活費を得て、ホームレスとして生きているんです…。」

悲しい声に胸が痛み、黙り込んだとき、

「助けて！助けてえ！！」

再び声のしたほうに目を向けると警備員らしき二人の男が女性を連れていくのが見えた。

「あ、おい女性が連れていかれるぞ！みんな！あの人を助けないと！！」

レニーは通行人に叫ぶが、街ゆく人は誰一人として助けようとせず、みんな通り過ぎていく…





「なんでみんな見て見ぬふりをするんだ？ どうして…」

僕は呆然とする。

「みんな怖いんです。男性であれ女性であれ国の政治を批判するようなことを言えば牢獄に行き、場合によっては5年から10年暮らさないといけないんです。」

「…もう我慢ならない。」

僕は小さく、けれどしっかりつぶやいた。

「おい…どうしたんだ？」

「どうにかして一回だけ女性も選挙に参加させる。」

「は…？ どうやって!」

レニーは間髪入れずに聞き返す。

「大丈夫。策がある…あ、申し遅れましたが、僕はフェアといいます。イズミ王国からきました。僕の肩に乗っているこいつはレニーです。」

「よろしく。」

「初めまして。私の名前はロディーシャです。レニー…さんは、言葉を話せるんですね…。」

「ああ。」

「…ロディーシャさん、僕とこの国の政治を変えましょう。」

僕は静かに、けれどもまっすぐにそう言った。



どんな風に選挙権を得る？

- ▶ 選挙権を得るための選挙をする→72へ
- ▶ 暴動を起こす→88へ
- ▶ 女性への差別について裁判で訴える→56へ
- ▶ ストライキ(デモをする・仕事を放棄する)→63へ
- ▶ 男性に誹謗中傷→104へ



女性への差別についての裁判を起こす



「では、さっそく選挙活動を行っていきたいのですが、僕は女性差別についての裁判を起こそうと思っています。」

「え…でも女性は裁判を起こせないって…」

ロディーシャは少し戸惑う。

「はい。なので、表面上は僕が起こします。実際に進めるのはロディーシャさんです。」

「内容は？」

レニーの質問に答える。



「起訴内容は主に二つ。まず一つが女性への暴力。

これはDV被害にあった女性の意見を集めようと思います。

二つ目は、女性だけ参政権がないことです。もしこれが不当だとされ、女性も参政権が認められたら政治の体制も変えられるし、女性が王になることも可能になります。」

ロディーシャは少しだけ考える仕草をして、

「わかりました。私はDV被害にあった女性を集めてきます」
吹っ切れた表情でそう言った。

「お願いします。僕は早速裁判を起こす手続きをします。」
…そういうことになった。



～裁判当日～

「では、起訴内容を確認します。まず…」

始まった。国に対して僕たち（女性達）は起訴を起こし、ここ法廷で裁判を行っている。

「では、原告側は起訴内容が正しいか、代表者の方お願いします。」

「はい。起訴の要は先ほどおっしゃられた通りです」

「では検察側、見解をどうぞ」

「はい、まず女性へのDVの件については加害者は正当な理由なく体罰を行っているので男性が、女性のことを考えなかった場合有罪になります。次に参政権の件ですが、こちらは憲法で認められていないものの、諸外国は女性が参政権を持っていて当たり前なのでこれは裁判長が判断するなり議論するなり方法があり、一概には言えません。」



「では次に、弁護側の主張をどうぞ」

「はい。まず、DV被害の件ですがこれは“男性に口答えをした” “家事を怠った”などの
正当な理由があったので訴え自体不当だ、というのと参政権は憲法で認められていないので
言語道断だ、というのが弁護側の見解です。」

弁護側は何をいまさら、といった感じで主張を述べた。

裁判長は裁判官の一人に何やら耳打ちをしている。

「判決は明後日に言い渡します。今日のところは閉廷します」

…とにかく明日を待とう。



「…あれがおまえの言っていた策か？」

僕は少し迷ってから答える。

「そうだよ。」

「女性の発言が認められていないこの国で、裁判を起こすなんて、無計画だろ！

もうお前にはついていけない。なんて無責任なことをしたか、わかってんのか？…俺は降りるぜ」

「ええ、ちょっと…」

どうということと、聞く間もなくレニーは僕の肩から飛び降り、こちらを見ずに走り去っていった。

「…」

少し気がかりだが…仕方がない。二日後の結果を待つことにしよう。

～二日後～

「では、判決を言い渡します。DV被害のほうは加害者を有罪とし、必要なら一件一件裁判を行います。
参政権のほうですが、こちらは次の選挙一回限りという条件付きで認めます。
選挙の後で女性に参政権は必要か、改めて議論してもらおうと思います。」

一斉にざわめきが起こる。

「やった、勝訴だ！」という歓声と

「なぜだ！」という嘆き声も聞こえる。

裁判を起こす作戦は成功し、非難の声はあるものの、
女性にも選挙権が与えられた！



男女平等の国

「確かに王たちがしてきたことは許されることではありません。ですが、
私たちから許すことこそが、この国の平和につながると私は思います」

ロディーシャは目いっぱい大きな声で発言した。
男性たちはすこし驚き、女性たちは軽くうなずいた。
やがて拍手が起きて、男女平等な国が認められた。

そのあと国民のみんなにも話して、———多少の反対はあったけど———ジョダンベッサは
誰もが平等に生きられる国となった。



ストライキ__女性が仕事を放棄し、デモを起こす。

「男性たちは、私たちを役立たずなど、下に見すぎている！」

「もう我慢できない！私は仕事を放棄するわ」

「私も放棄する。みんなも男性たちに思い知らせてやろう！」

そう。僕は女性にデモを起こしてもらうことにしたのだ。

僕もみんなと一緒に街をまわった。

そして、国の半数以上の女性が仕事を放棄した。

「…あれがおまえの言っていた策か？」

耳元で囁くレニーに、僕は少し迷ってから答える。

「そうだよ。」

「もうお前にはついていけない。」

「え…」



どうということと、聞く間もなくレニーは僕の肩から飛び降りて、
「…勢いだけで計画を進めるなよ…！俺は降りるぜ」

「ええ、ちょっと…」

こちらを見ずに走り去っていった。

「…」





2日後。

「戻ってきてくれ、俺が悪かった…」

「お前のことを悪く言って、すまない…。俺が間違っていた」

「いやよ、あなたの所には帰らないわ！」

さらにその翌日。

「国王、国の女どもが仕事を放棄しています」

「なんだと…どうしようか」王は少し考えてから言った。

「では、女どもの代表者を連れてこい」

「わかりました」

王の家来たちはフェアと女性のもとへやって来た。

「代表者の方を呼んでもらえるか」

「何か御用ですか？」

「王が話したいと申されている、王宮へ来てもらえるか？」

ロディーシャがフェアの耳もとでつぶやく。

「フェアさん、王と話せるチャンスです、行きましょう」

「分かりました。…王宮へ行かせてください」

「分かった、では馬車に乗ってくれ」





王宮に到着した。

「王様、連れて来ました」

「やっと来たか、さっそくだが」

一度僕らと目を合わせ、王は次の言葉を放つ。

「ここ3日ほど、女性どもが仕事を放棄していると聞いたのだが」

「その通りよ、何か問題でも？」

「今すぐやめさせろ。」

冷徹に言い放った王に気圧されつつも、ロディーシャは答えた。

「わ、分かったわ…でも条件がある。」

「何だ？」

「私たちを選挙に参加させることよ」

「なに？そんなことを許すと思っているのか？」

今にも怒りを爆発させそうな王を見上げて、ロディーシャは言う。

「誰からも反対の意見が上がっていないのに条件をのまない、なんてこと王様ならしないわよね？」

「…仮に意見を聞き入れたとしよう。女性側が負けたらどう責任をとるんだ？」

フェアは口をつぐんでいたが、この言葉に目の前がカッと赤くなったように感じ口を挟む。

「責任がどうこうの話ではないだろ！今まで選挙で負けた人は全員責任を取ってきたのか？」

それに彼女の言うとおり、誰の意見も聞いていないのに否定するなんて

王としておかしいんじゃないか！？」

「……わかった。おい。女性も次の選挙に参加させてみよう。

これはもう決定事項だ。」

そう言って王は家来に指示を出す。



やった…！ストライキを起こす作戦は成功し、女性も選挙に参加できるようになった！

「ありがとうございました。フェアさんたちのおかげでこの国にも平和が訪れました。
感謝してもしきれません…！」

「いえいえ、僕はことはしてませんよ。ロディーシャさんがここまで努力してきたからです。
これからも王として、頑張ってくださいね！」

僕らはお互い感謝し、励ましあって別れた。





「レニー、僕らが来たときとは大違いなほどににぎやかで、とても温かく感じるね。ゴミが散乱してた道も見違えるほど変わっているし、気のせいかもしれないけど、空気がきれいに感じないか？」

「そうだなフェア、みんなの表情も明るくなった。」
フェアは、「旅の記録」にこれらのことを書き込んだ。

- ・ ジョダンベッサ王国に訪れたこと
- ・ ロディーシャさんに出会い、この国の現状について教えてもらったこと
- ・ レニーが言っていた、実はイズミも、昔は選挙権が平等に与えられていなかったという話
- ・ ロディーシャさんが選挙に立候補して、国王に選ばれたこと
- ・ 男女みんなが平等に生きられるのが当たり前じゃない国もあること
- ・ いろんな人の意見を聞かないと、自分に都合のいいことしかしない人が代表になってしまうこと
- ・ イズミ王国もジョダンベッサ王国も、はじめは権利が偏っていたのだから自分に与えられた権利はちゃんと活用しないといけないんだと思ったこと

「ああ。…ん～…少し疲れたな…今日は宿に泊まって、明日この国を出よう」
翌日、僕たちは船に乗り、大勢の人に見送られながらこの国を出た。

_____こうして、ジョダンベッサ王国の旅は終わった_____

君は…

- ▶ まだ一つしか国を訪れていないので、今度は「ウヨキカン」に行こう。→21へ
- ▶ もう二つの国を訪問した！よし…イズミ王国に帰ろう。→108へ

選挙権を得るための選挙をする

その日の夜、僕たちは国王と会談していた。

「お願いします。一度だけ女性を選挙に参加させてもらえませんか。」

「不可能だ。仮に女性側が負けたらだれがどう責任をとるんだ？」

国王のこの言葉に、僕は目の前がカッと赤くなったように感じた。

「…責任がどうこうの話じゃないでしょう！？この国では選挙で負けた人は全員責任を

とってきたんですか？それに誰にも意見を聞いていないのに否定するなんて王としてどうなんですか！？」

僕はこれまでになく語気を強めて王に話す。

「昔から女は汚らしいものとされてきた。そんな奴が政治に関わってはならん！」





ロディーシャは何か言いたげに王を睨んだ。

「女性は汚れてなんかいない！現に今そんな政治をしたからこうなっているんだ。
大切なのはこの国をどれだけよくするかだ！たとえそれが女性であろうとも！」

「…フン。いいだろう。一週間の後国民に投票をさせよう。男性だけが政治に参加するのか、
女性も参加するべきか。」

国王の言葉に、ごくりと唾を飲み込む。

「万が一後者が多かったら、男女平等な選挙をしよう。」
フェアの直談判の末、一週間後に投票が行われることになった。

「…あれがおまえの言っていた策か？」
レニーに聞かれて、僕は少し迷ってから答える。
「そうだよ。」

「もうお前にはついていけない。」

「え…」

どういふことか、聞く間もなくレニーは僕から飛び降り、

「いくらなんでも危険すぎる！俺は降りるぜ」

「ええ、ちょっと…」

こちらを見ずに走り去っていった。

「…」

少し気がかりだが…仕方がない。明日から活動を始めすることにしよう。





～1日目～

「あ、ロディーシャさん！おはようございます。昨日寝る前に考えたんですけど、この戦いはビラ配りで勝負しようかなと。そしてこの運動を‘参政権運動’と名付けることにします！」
と言いながら、“国民全員に参政権を！！”と大きく書かれた紙をロディーシャに見せた。
「賛成です！」
「では早速配りに行きましょう…！」

2人は城下町から少し離れた商店街に来ていた。フェアは女性が夕飯の買い出しに集まる商店街を選んだのだ。
「女性のみなさん！この国は男性に支配されています！このままでいいのですか！」
「みんなでこの国を変えませんか！」「ご協力お願いします！！」「お願いします！！」
…その後何度も訴えかけるが女性の耳には届いていないのか、誰一人見向きもしない。
この日ビラを受け取ってくれたのは0人だった。
「……今日はここまでにしましょうか。」
「はい…。」



～ 2 日目～

「おはようございます。今日も頑張りましょうか。」

ロディーシャは昨日の女性たちの反応を気にして、元気がない様子だ…。

今日も2人は女性が集まる城下町に来ていた

「みなさん！この国を変えたくないんですか？皆さんの協力がないと無理なんです！」

「他の国は男性にも女性にも平等に発言する権利が当たり前にあるんですよ！」

この言葉を聞いた数人の女性が、こちらに目をむけた

「この国は支配されているんです！！」

「ご協力お願いします！！」

この日フェアたちは一時間ほどビラ配りをし、約80人に受け取ってもらうことができた。

～3日目～

コンコンコン

ノックの音が聞こえて扉を開けると、そこには5人の女性がいた。

「朝早くにすみません。昨日のビラを見て私たちも協力したいと思って…。

実は私たちも昔からこの国はおかしいと思っていたんです。なので私たちも参加させてください！」

「え！本当ですか！ぜひ協力してください！！」

この日からフェアとロディーシャに加え5人の女性と一緒に参政権運動をすることになった。

その日から徐々にビラを受け取ってくれる人が増え、

6日目にはジョダンベッサ王国に住む女性のほとんどが2人と共に参政権運動をしていた。

少しずつ希望が見えてきたとき、フェアはふと思い出す。

「そういえば国王はどんな活動をしていたんだろう。

自分たちの活動に夢中になってすっかり忘れていた。」





「噂によると国王は何もしていないそうです」

「え!?あの国王が何もしないわけ…なにか考えがあるのか？」

そして1週間が経ち、ついに投票の日。民衆たちは国王の城の前に集まっていた。

「女性を選挙に参加させるな！！」

「男女平等の国にしよう！」

様々な意見が飛び交う中順番に投票が行われていく。

そして民衆全員の票が集められた。

「全員の票が集まったようだ。では、開票するのでしょうか。」

選挙管理委員の手により次々と票が分けられていく。そして。



「集計結果が出ました。」

「ついに結果発表ですね。」

「はい」

僕の言葉に、ロディーシャは不安そうにうなずいた。

「きっと大丈夫です！自信を持っていきましょう！」

「ですね！結果がどうであれこの一週間、本当にありがとうございました。」

「いえいえ。」

僕らが微笑みあう隣で、国王がそれをあざ笑う。

「うぬぼれるな。わしが負けるわけないだろう。」

「まあまあ。結果を聞きましょう。」



「結果は・・・ロディーシャの勝ちii！！」
民衆たちはどっと歓声をあげた。

「え・・・」

「勝った！勝ったぞ！やったあ！…でもどうして…男性の人口の方が多いのに…？」

「私たちの運動の噂を聞いた男性も投票してくれたそうです！」

「そうだったのか。頑張ったかいがありましたね！」

「はい！！」

あちらこちらから喜びの声が聞こえてくる。



「え…、まさかわしが負けるなんて」

「国王、約束通り男女平等な選挙をしよう。いいな？」

「わかった。しょうがない。」

「ありがとうございます！」

ロディーシャは涙ぐみながらお礼を口にした。

「フェアさん万歳！フェアさん万歳！」

女性たちはロディーシャに祝いの言葉を浴びせた。

「フェアさん！本当にありがとうございました！」

「ひとまずよかったですね。でも勝負はここからです。よし。
この調子でジョダンベッサ王国を変えましょう！」

「はい！頑張りましょう！！」

「選挙の方法は前回と同じでいいな？猶予は一週間だ。せいぜい頑張ろうじゃないか。」
国王はそう言い、なにか企んでいるような黒い笑みを浮かべた。

「国王はなんとしてでも勝ちに来る。
何をしてくるかわからないから気を付けないと！」

選挙権を得るために選挙をする作戦は成功し、
女性にも選挙権が与えられた！



女性有利な国

「私は、女性有利な国にしていきたいと、考えます。私はやっぱり、王や男性たちのやってきたことを許すことはできません。反対はありますか？」

元王は少し小さな声で言う。

「私たちには何も、言えることはないよ」

ロディーシャは話を進める。

「では、どのような国にするか意見はありますか？」

ロディーシャと以前からよく話していた女性は答える。

「私は、いままで男性の警官が女性が何も意見をいえないことをいいことに、嫌がらせしているところをたくさん見てきました。」

悔しそうな顔で話をつづけた。



「だからこそ、警官は女性になるのがいいと思います。」

ロディーシャはうなずきながら答えた。

「わかりました。警官は女性が勤めましょう。」

その後さまざまな意見が出され会議が終わる。





～ 3 日後～

「なんで女なんかに仕事を奪われなきゃいけないんだ！」
「そうだそうだ！」と男性は怒りを爆発させた。

その様子を見ていたフェアは、

「これじゃあ前と同じじゃないか」とつぶやく。

「たしかに。選挙をした意味は何だったんだろう。男女平等な国をつくるんじゃないかったのか・・・」

2人はロディーシャのもとを訪れた。

「ロディーシャ。このやり方は間違っている。やっていることは男性と同じだぞ。」

「違う・・・間違ってるんかい。もと言えれば男性が悪いのよ。」

「みんなが平等に生きられる国をつくりたいと言ったのは君じゃないか。」

「・・・」 ロディーシャは黙り込んだ。

「・・・やっぱり男性は許せない！その男を追放して！！」

「きつといつかこの国は崩壊する！勝手にしろ！」

～1週間後～

その後ジョダンベッサ王国には、フェアの予想通り混乱が広がっていた。

そしてフェアは気づくのだった。

「男性だけでは政治はまわらない。女性だけでも治安は保てない。

だから男女関係なく、協力していくべきなんだ…」



フェアは、「旅の記録」これらのことを書き込んだ。

- ・ ジョダンベッサ王国に訪れたこと
- ・ ロディーシャさんに出会い、この国の現状について教えてもらったこと
- ・ レニーが言っていた、実はイズミも、昔は選挙権が平等に与えられていなかったという話
- ・ ロディーシャさんが選挙に立候補して、国王に選ばれたこと
- ・ 男女みんなが平等に生きられるのが当たり前じゃない国もあること
- ・ いろんな人の意見を聞かないと、自分に都合のいいことしかしない人が代表になってしまうこと
- ・ イズミ王国もジョダンベッサ王国も、はじめは権利が偏っていたのだから
自分に与えられた権利はちゃんと活用しないといけないんだと思ったこと

———こうして、ジョダンベッサ王国の旅は終わった———

君は…

- ▶ まだ一つしか国を訪れていないので、今度は「ウヨキカン」に行こう。→21へ
- ▶ もう二つの国を訪問した！よし…イズミ王国に帰ろう。→108へ

不満を持った女性たちで暴動を起こす

「男性たちは、私たちを役立たずなど、下に見すぎている！」

「もう我慢できない！私は暴動を起こすわ」

「私も一緒にする。みんなも男性たちに思い知らせてやるわ！」

そう。僕は女性に暴動を起こしてもらうよう、頼んだのだった。
そして、国の過半数以上の女性が一斉に暴動を起こし始めた。

少し経って僕はレニーに呼びだされた。

「…あれがおまえの言っていた策か？」





僕は少し迷ってから答える。

「そうだよ。」

「お前にはついていけない。」

「え…」

どうということと、聞く間もなくレニーは僕から飛び降りる。

「暴力で解決するなんて！俺は降りるぜ」

「ちょっと待って…」

レニーは口もきかずどこかへ行ってしまった。



フェアが女性たちのもとへ戻ると…

パリンッ！

女性がガラスを割る音が鳴り響き、その場に一瞬だけ沈黙が流れた。

「おい！何してる？」

「今すぐやめろ！」

男性たちは女性たちを抑え込む。

「離しなさいよ！」

「やめて！」

男性はすぐさま王宮に通報し、数十分後、王の家来が現れ言い放つ。

「ただちにお前たちを拘束する」

そうしてあっという間に女性たちが捕まってしまった。



「お前もこの騒動に関わっていると聞いた、拘束させてもらう」
待ってください、と声をあげる間もなく、フェアも女性も地下牢に連れていかれた。

「全員、牢屋へ入れろ」
王の言葉で、一斉にみんなが牢屋に放り込まれる。

「僕のせいで…」
悔しさに唇を噛んでいると、不意に扉の開く音が響く。

ガチャ

フェアがドアのほうを見ると、看守がカギを開けていた。

「何しているんですか？」

「カギを開けている」

看守は淡々と告げ、扉を開ける。

「まったく…何しでかしてんだよ…ほら、さっさと行きな。

この国中の女性があんたたちを待ってるんだ」

「わかった、ありがとう…！」

（どういふことかわからないけど）看守のおかげで全員の牢屋を開け、フェアたちは王の家来の目を掻い潜り王宮から抜け出した。

「抜けだすことに成功したけどばれるのも時間の問題よ…」

「もう無理よ…諦めましょう。私たちはこれからも息をひそめて生きていくのよ…」

「まだまだ。別の方法があります」

——暴動を起こす作戦は失敗に終わったが、フェアたちの挑戦は続く——

▶ [55に戻って選びなおそう](#)





その後、フェアはロディーシャと演説の準備を進め、宿に泊まった。

次の日．．．

「じゃあまず昨日の間に作ったビラを配りましょう。」

「はい！」

選挙活動が始まった。女性は見えていないふりをしつつもビラをもらってくれたり、応援してくれる人もいる。しかし、男性はなかなか受け取ってくれない。

どうしてだろう…？

「なんで女性が意見してるんだよ。」

「国王はあいつらを捕まえないのか。」

周囲で男性たちがコソコソと話す声は、フェアたちには聞こえていなかった。

その日の夜．．．

「本当にこれで大丈夫でしょうか？」

ロディーシャは不安そうに問いかける。

「大丈夫です！4日目の途中結果できっと、間違っていないことがわかるはずです！」

2日目、3日目、とビラ配りは続いた。



その翌日。

「途中結果を発表する。」

司会がバンと票の乗っている紙を張る。

国王派 3 9 3 2 票

□ディーシャ派 1 2 1 1 票

男性たちの歓声が上がった

「なんで．．．こんなに差が．．．」

□ディーシャは言葉すらでなかった。

「本来ならここで終わってもよいがせっかくだ、まだ選挙自体は続けてもよいだろう。」

「さすが王！お心の広いお方だ！」

町の男性たちが王に賞賛の言葉を浴びせる。

フェアたちはくやしさに下唇を噛みながら、宿に帰った。

「なんで負けたんだ？」

「反応は良かったはずなのに．．．」

フェアが窓を覗くと、

「…えっ…！？」

配ったビラが捨てられていた。

それを見たフェアは、あっ、と声を上げる。

「そうか！女性でも男性と暮らしている人が少なくない。男性が女性に投票させるはずがない。」

「そんな．．． どうしたらいいの？」





「このままじゃだめだ。でもどうやったら．．．」

「まったく…しょうがないやつだな。」

背後から聞きなれた声がして、フェアは振り向いた。

「レニー！！！」

「初めて権利をもらえて、浮かれてるからだろ。」

戻ってきた相棒—レニーは、やれやれ、といった様子で言う。

「別によろこんでもいいだろ。」

「そうですよ。素直に喜びましょうよ。」

二人の言葉に、レニーは顔をゆがめる。

「実はだな。すべて王の策略だったんだ。」

そう聞いて、フェアとロディーシャは雷に打たれたかのような感覚を覚える。

「え．．．王は、折れてくれたじゃないですか！」

「王はわざと引き下がったんだ！女性も含めた選挙で勝って、
自分たちが正しいんだって知らしめる気なんだよ…」

「そんなの勝てないじゃないか！」

「そんなこと、ここで言ってもなにもならないだろ。」

「だってそんな…そんなひきょうなこと、許されないだろ！」

怒鳴りあいが続く。



「落ち着いてください！！！」

突然の大声にフェアとレニーは口を閉ざした。

「こんなピンチに怒鳴りあってもしかたがないでしょう！ここは協力して勝つほかないですよ！

「そ、そうだな…。悪かった。」

「そうですね。…ごめんレニー。」

「いや、いいんだ…で、じゃあこれからどうする。このままビラ配りで勝てるのか？」

「何かほかの策を．．．」

フェアとレニーがまた黙り込む。その沈黙を破ったのもまたロディーシャだった。

「…じゃあ、こんなのはどうですか」

二人はロディーシャの案を聞くと、同時につぶやく。

「なるほど！」





それを見たロディーシャは、くすっ、と吹き出した。

「ふふ、やっぱりお二人はとっても仲良しですね！」

フェアたちはロディーシャの策を最終日に実行することにして、再びビラ配りをしたり、新たにボランティアを始めた。5日目、6日目になっても、王は何も行動を起こさなかった。

そして、遂に7日目、最終日。

「ロディーシャさん、お願いします。」

フェアがロディーシャの顔を覗き込んで言うと、彼女は力強く頷いた。

ロディーシャの出した策は、ほかの国の様子、自分たちがされてきたことや、気持ちなどをすべて伝えることだった。



「この国は間違っているんです。本当は同じ人間なのに性別が違う、体が弱い、働けないことを理由に立場を変えたり、暴力ふるうことは許されることではありません！今こそみんなで立ち上がりましょう！」

ロディーシャの演説は立ち入る人々の足を止め、すべての人がそれに聞き入った。

——そしてついに結果発表の時間。

「勝てるんでしょうか」

ロディーシャはすこし不安そうに問いかける

「今度こそは勝ちますよ！なんたってあの演説。すごかったですよ。」

「ああ、さすがだな。」

三人が話していると、突然大きな声が響きあがった。

「王の御なありいいいいいい」

響き渡る歓声とともに、王が椅子に座った。

「いうこともない。さっさと結果を述べよ」

「結果は. . .

国王派 4 3 6 2 票

ロディーシャ派 5 6 2 5 票

で、ロディーシャが王に選ばれましたあああ！！！」

「…やった. . . やったぞ!!!」





数時間後

「私たち…本当に勝てたんですね！」

「これで私たちも差別されずに生き活きと過ごしていけるのね…！」

「これも全部あなたのおかげです、フェアさん！本当にありがとうございます！」

「…いや、きっとみんなが一生懸命頑張ったからだよ。」

家来と共にその様子を見ていた王が、フェアたちのもとへ近寄ってきた。

「すまない、正直君たちの意見を聞いて、心からいい意見だと思ってしまった…」

「いいんですよ。ここからまたより良い国へと変えていきましょう。

それとこの後、法律を変える会議があるのですが、参加してもらえますか？」

「…はあ…？私がか？」

「あなたの意見はとても大事だと思ひまして。」

「…本当に、ありがとう」

そして、会議が始まった。

「これからの政治について話し合いたいです」

王となったロディーシャが進めていく。

次々に意見が出され、それらは最終的に大きく二つに分かれた。

どんな国にする？

▶ 男女平等な国 →62へ

▶ 女性有利な国 →83へ





我慢できなくなった女性たちは、男性への罵倒を始めた

「男性は私たちのことを見下しすぎているのよ」

「そうよそうよ！もう我慢できない！いっそのこと男性なんていなくなればいいのに！」

「え…それはさすがに筋違いじゃあ…」

「なんで？今まで男性はそういうことを私たちに言ってきたのよ！？」

女性たちはヒステリックに叫びだす。

その様子に、街ゆく人々は男女関係なく、なんだなんだ、と注目し始める。

そして次第にそれは大きくなっていく…。

「うわぁ！何をするんだ！！」

見ると女性が男性に卵を投げつけていた

「男どもはほんっとバカ！」

その女性は通りかかった男性全員に卵を投げつけていた。

しばらくして僕はレニーに呼び出された…。



「あれがお前の言っていた策か？」

「え…」思わず僕は言葉に詰まる。

「あんなふうに、女性が男性を前にされたみたいに差別発言をしたり、暴動まがいのことをしたりしてまで女性たちに主張させるのがお前の策だったのかといている。」

レニーは冷たい口調で言い放った。

「…」

「はあ…もうお前にはついていけない。」

「…は…っ」

どうということ、と聞くまもなくレニーは僕の方から飛び降り、走り去ってゆく。その刹那。

「こいつを押さえろ！」

という声に振り返ると、男性と王の家来がさっきの女性をおさえていた。

「失礼ですがフェアさんですか？」

「はい…そうですが…」

「あなたには暴動および誹謗中傷を扇動した容疑で逮捕命令が出ています。」

「…え…っ」

そして僕も、身柄を拘束された。

～数時間後～

いま、僕は牢獄に入られている。

まったく…結局何のために活動を始めたんだ。

そんなネガティブなことばかり頭によぎる。

「…い……おい。…おい！」

ついに幻聴まで聞こえ始めたか…僕も終わりだな…。

「おい！」

…違う。幻聴なんかじゃない…！

振り向くと、フェアの後ろに看守が立っていた。



「お前、いい加減にしろよ。何回呼んだと思ってんだよ」

「すみません。幻聴かと…」

「あーもう謝るな。お前には正しい方法で男女平等な国を作ってもらおうと思っているんだ」

そう言うと看守はカギを開ける。

「俺は今の国が正しいとは思わないんだ。だが俺は思うように行動できない。

だから、頑張ってくれないと困るんだ。行けよ」

…よくよく考えたら脱獄だけど…まあいっか。

そう思いながら僕と女性たちは宿へ逃げた。

…男性への誹謗中傷をするという作戦は、失敗に終わった。

活動は明日からもう一度、やりなおそう。



▶ [55に戻って選びなおそう](#)

エピローグ ～イズミ王国～



気のせいか、足の指先が痛い。

…靴の中に小石でも入ってるか？

秋風がくるぶしのあたりを吹き抜けた時、

フェアはズボンの丈が短くなっていることに気付いた。

ああ、そうか。足、前より少し大きくなったから、靴が小さくなっちゃったのかもな。

旅を終え、再び故郷に降り立ったフェア。

二つの国を巡った日々の鮮明な記憶が、まるで昨日のような、

はるか昔のことのような不思議な感覚を抱きながら、王宮へ歩く。

「よく戻った。無事で何より。」
と安堵した表情のエメルに対して

「で、で、どうだったんだい。何か有力な情報はあったのか。」と
焦る様子 of イムレ。

まったく…相変わらず噛み合わない二人だ。



「たくさんの人との出会い、共有した時間...

僕はこの旅を経て、数えきれない財産を得ました。

その一部でしかないけれど、この旅の記録を元にご報告します！」



▶ 今、自分の『旅の記録』はほぼ全部記入されている→111へ

▶ 今、自分の『旅の記録』は、空欄が五枠以上ある→116へ

「...。なんということだろう」
二人とも、目を丸くして渡した記録を読んでいる。

「そうか...私たちに足りなかったのは、
この思考だったのかもしれない。ありがとう。
君のおかげで気づかされた。
国のリーダーであるために、何が必要か。」

しだいに二人は、ぼろぼろと涙を流し始めた。
涙をぬぐいながら、エメルが続ける。グスッ、グスッとすすり泣く声が広間に響く。



「そして、それを選ぶのは、真のリーダーを選ぶ判断力を持った国民であること。」
しかしフェアは、感極まり涙を流す二人に対して、上の空で考えを巡らせていた。



「おい...聞いているのかね、フェア。」

「つまり私たちは、フェア君の旅の記録に…」

国王候補たちの言葉もほどほどに、フェアは考えていた。

この二つの国を巡り、出会った人々との交流、そこで共感した感情、
知り得たその国のルール、それを支える社会の仕組み…。

うん、面白い。…面白い。
きっとまだまだ知らないことばかりだ。

きっとこの旅、違う国に訪れれば、
また違う情報を得ることができる。

血が騒ぐのは、情報屋が天職だった証かもしれない。
「旅はまだ、始まったばかりだと思うんです」



二人はフェアの言葉に一瞬驚いたあと、顔を見合わせて微笑んだ。

「…ふふ、そう来ると思った。」

「我々も、気づいていたがね。次の国の情報、また君が戻る日を心待ちにしているよ」

「そうと決まれば、ぐずぐずしてられない！」

そう言い残して旅立つフェアの姿が、丘高い宮殿から見晴らす
空高い秋晴れに、溶け込んでいく。

——旅はまだ、始まったばかりだ——







「うむ…他国もそんなものなのか？」

「なんというか…情報が足りないような…」

「すみません。正直なところ、僕自身、満足できていません。

もっと情報を持ってきます…もう少し時間をもらえませんか」

「…わかった」「仕方ないよ。この国のことは任せろ、安心して行って来い！」

——次の国でこそ、情報屋としての力を発揮できるように集中しないと。

気合いを入れなおし新たな旅へと足を運ぶフェアと、

その晴れない横顔を心配そうに覗きこむレニーだった。

